

【資料紹介】

横浜市公田ジョウロ塚遺跡採集

縄文時代土製頭部片の圧痕について

千葉
小畠
(熊本大学文学部)
弘己

毅

はじめに

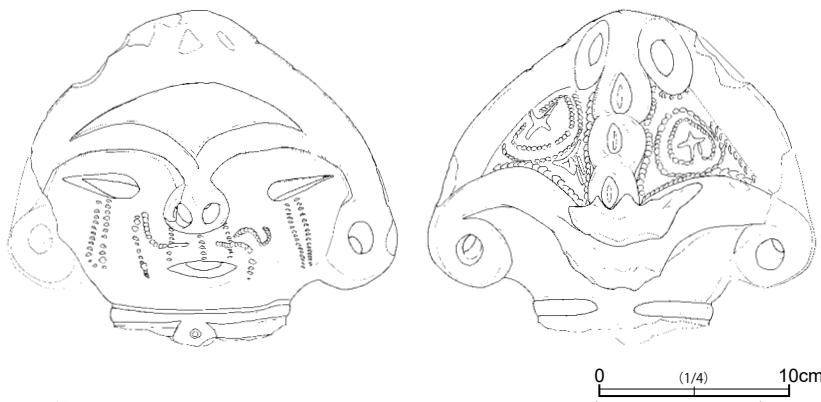
二〇一九年、当館が所蔵する横浜市栄区公田ジョウロ塚遺跡採集土製頭部片（第1図、資料番号：CX0005551）のX線CT撮影を行った（千葉二〇一九）。撮影された画像から、種実圧痕の可能性がある五箇所の空隙を見出し、そのうち一箇所はツルマメの種実圧痕である可能性を指摘した。この度、当該圧痕を再検討したところ、積極的にツルマメの圧痕とは同定できないことが確認されたため、改めて報告する。（千葉）

一 対象資料と圧痕分析の経緯

対象資料は、縄文時代中期中葉の大型の土製頭部片である。⁽¹⁾ X線CT撮影により、後頭部に長さ6・5mm程でやや扁平の空隙が確認されている（第2図）。その形態から、前稿では当該期土器に散見されるツルマメ圧痕の可能性を指摘した。

蛇体装飾の把手にはマメ圧痕が残るケースがあるが（中山他二〇〇八など）、土偶や顔面把手では少ない⁽²⁾。本資料は頸部以下を欠損し、器形の判別が難しいが、いずれにせよ種実圧痕が存在するならば貴重な事例となることから、改めて当該空隙の検討を行うこととした。

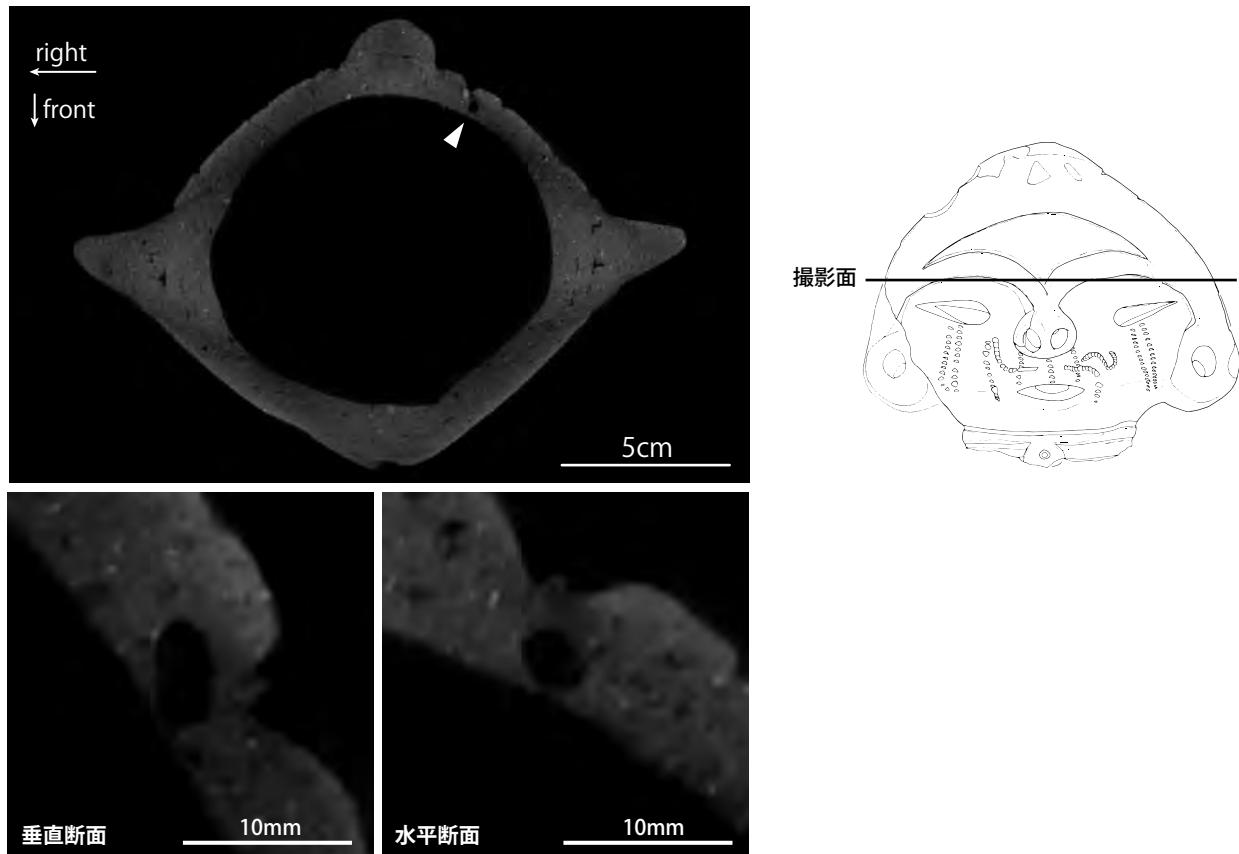
（千葉）



第1図 横浜市公田ジョウロ塚遺跡採集土製頭部片（千葉2012より）

【キーワード】
種実圧痕 潜在圧痕 縄文時代 土偶 顔面把手 X線CT撮影

【要旨】
当館所蔵の縄文時代土製頭部片に見られたツルマメ状の空隙（潜在圧痕）について、詳細に再検討したところ、積極的にはツルマメ圧痕とは同定できないことを確認した。



第2図 ツルマメ圧痕の可能性を指摘した空隙（千葉 2019 より）

二 分析の方法

当該圧痕の検討にあたり、二〇一九年に撮影されたX線CTデータをもとに3D画像解析ソフトmyVGL 3.1を使用して断層画像の観察を行つた。前稿では、断層画像による観察所見を記したのみであり、より立体的に観察を行うために、同ソフトの欠陥・介在物解析機能の体積別の着色機能により、3D画像中において、目標の空隙の位置を特定し、それ以外の空隙も観察した。また、操作性のよさから、同ソフトで作成したSTLデータをMolecular Plus ver 1.8でも観察・表示した。

（小畠）

三 結論

目標のツルマメ圧痕と推定されていた空隙部は土偶後頭部の左側ほぼ中央の△窪み（三叉文）の内部に位置する（第2図、第3図・bの白線円）。再度断面形とSTLデータによる3D画像を詳細に観察してみた。この空隙は楕円形のダイズ属種子の形状に似ているが、断層画像にるように、横断面がきれいな楕円形にならず、緩い角（突出部）をもつ。加えて、やや斜め縦断面にも角張る部分をもつており、これがダイズ属種子ではないことを示している（第3図・c）。3D画像（第3図・d、第4図・ア）を観察しても、表面がデコボコであり、ダイズ種子とは同定できない。前稿では、これ以外に一～三mmほどの円形の空隙について種実である可能性が指摘されているが、空隙の画像中には種子らしきものは認められなかつた。一方向の断層画像で円形に近いものでも、3D画像ではデコボコの外形をもつ（第4図・ウ）。このほか、空隙には茎のようなものが一部認められる（第4図・イ）が、線状もしくは面状のもの（第4図・エ）は、粘土と粘土の接合面の隙間である。